

変わらないものと、
変わらなくてはいけないもの。



藤井隆 (コメディアン)

「なるべく『平等で清潔で楽しそう』なほうへ。」
これは今年5月に上梓された
初のエッセイ集『マ・エノメーリ』の帯文です。
会社員時代にオーディションを受けてから今までを振り返り、
謙虚な気持ちと感謝の言葉にあふれたこの一冊。
コメディアン、歌手、俳優——
さまざまな分野で才能を発揮する藤井隆さんにお話をうかがいました。

本心をみせるより

「まとう」ことが好きだった

——初のエッセイ集『マ・エノメーリ』は、全編書き下ろしとのことですが、藤井さんの謙虚さや、人を尊敬する心がよく伝わってきます。

自分を振り返って書いてみると、結果、謙虚にならざるを得なかったですね。やっぱりすべて周りの人から学んできたことだなとあらためて思います。自分からキャッチしないといけないこともあると思うんですけど、自分に関して言うと、手取り足取り教えてもらった気がします。恥ずかしながらいまでも、一から丁寧に教えていただくような仕事も多いです。自分だけで完結できていることって、本当に少ないと痛感します。

——吉本新喜劇は、自分の名前がそのまま役名になる劇団で、デビューしてから「自分なのに自分じゃない時間」が仕事をしている時間になったと書かれていました。

とてつもなく毎日が楽しかったことを覚えています。それでもいま振

り返ると、自分から「こうやったら面白くなるな」とか「こうしてみたいな」とかいうのが全然ないまま、7、8年ぐらい過ごしていました。自分がもしマネージャーだったら、あきれちゃうような新人です。どこか人任せであったり、役任せとか。何かを「まとう」のが好きで、本心をお見せすることに自信がない出発だったので、今回の本は自分にとっては挑戦でした。

——一方で、藤井さんの独自の世界観は人々を魅了しています。『ザ・狩人』(2011〜2013、読売テレビ)は、この星に誤って降り立った宇宙人が地球の最新情報をお届けするという、歌って踊る唯一無二のバラエティ番組でした。

うそでしょう?! あの番組を見ていただいたのはめっちゃうれいんです。実は『ザ・狩人』が終わった時、もう本当に終わったなと思ったんです。テレビって、始めれば終わるのが当たり前で、自分もどなたかの終わった番組の後をいただいてやってきたので、『ザ・狩人』以前は「しょうがないですよ」と他人事だった

かもしれません。でもあの番組は思い入れが強かったし、スタッフのみなさんや出演者さんと濃厚な関係性だったのもあり、初めて燃え尽きた感覚になったんです。デビュー当時は、やりたいことがまったくわからなかったんですが、これまで出会わせてもらった仲間や先輩たちと面白いものを追求できました。実はあの番組が、ものすごいターニングポイントだったと思います。

——その番組で共演されていた椿鬼奴さんとは、後に藤井さんの音楽レーベル「SLENDER RECORD」で一緒に楽曲リリースもされています。バラエティでも音楽でも、仕事の仲間や環境づくりにこだわりを感じます。

たとえばスポーツだと、団体競技はまるでだめなんです。野球とかドッジボールとか、すごいプレッシャーを感じてしまう。マラソンとか水泳

とかなら平気なんですけどね。僕の場合、チームプレーで何かを作るというのは、単純な話、嫌いな人がいないからできているだけなんです。普通のお仕事なら、好き嫌いに関係なく向きあわなくてはならない状況が多いでしょうし、「好きな人と集まってやってるだけじゃん」って思われちゃうかもしれません。僕がやっている音楽レーベルのプロデューサー業も本来はそういう部分があるはずで、本当のプロデューサーに全然なれてないのが恥ずかしいんですけど。それでも、自分が好きな人と仕事ができる自分の環境はとっても恵まれていると感じています。

時代の変化と
果敢に向き合っていきたい。

——本の帯には「なるべく『平等で清潔で楽しそう』なほうへ。」という

僕が言っている「平等」って、
そんなに高尚なことではないんです。

現代短歌の半世紀

——おなじ31音のリングに立つ

歌人 瀬戸夏子さんに聞く

「なにか興味あるものある？」
「ああ、短歌とか」

——短歌を作るようになったきっかけを教えてください。

私は今39歳なんですけれども、私の世代で短歌を始めた人の8割ぐらいは穂村弘さんの影響だと思います。あとは俵万智さんや杵野浩一さんですね。特に穂村さんは、当時エッセイをたくさん書かれていたのもあって、そこにサブカル的な興味を持った大学生とかが多かった印象です。

——瀬戸さんは、穂村弘さんの歌集『手紙魔まみ、夏の引越し(ウサギ連れ)』(2001年、小学館文庫)に特に影響を受けたそうですね。

一般的に当時はまだ、短歌を読む

ですよ。例えば、読んだことないけど村上春樹が嫌いつて言う人はいっぱいいますよね。村上春樹ほどではないにしても、ちゃんと読んだことないけどなんとなく反感をもっている人が出てくるぐらい、短歌に対する一般像ができてきているのかなと思います。

それから「短歌ブーム」で注目されがちなのは、SNSでの投稿など若者の世代が中心だと思うのですが、それとは別に新聞などの歌壇には上の年齢層の歌もたくさん投稿されています。最近面白かったのが、永田和宏さんの『人生後半にこそ読みたい秀歌』(朝日新聞出版)という本です。

という習慣があまりなくて、教科書

で見たことがあるくらい。『手紙魔まみ』は、表紙を当時人気だったタカノ綾さんが描かれていて、書店ですぐ目立っていたんです。なんだかおしゃれな本があるなと思って読んだら、それが短歌の本だった。でもそこに書かれているのは、教科書で見たものとはまた違って、自分がすぐくのめり込めるというか、リアルで、今生きている表現でした。それが10代だった自分の気持ちに突き刺さって、短歌に惹かれていきました。

——なるほど。ただ、短歌を読むことと、実際に自分で作ってみようということには、ちょっと開きがあるような気もするのですが。

『手紙魔まみ』に衝撃を受けて、そ

人生後半を迎えた歌人の、お金や定年退職、離婚や再婚、介護など、さまざまな歌が紹介されているのですが、お説教くさくなくて、気づきがあって面白いです。短歌ブームの一方で、若者の歌とは違う面白みが伝わってくるこういう本は大切だと思います。

短歌ブームを考える
——穂村弘と俵万智以降

——瀬戸さんの『はつなつみずうみ分光器 after 2000 現代短歌クロニクル』(左右社)は、2000年以降の様々な歌人を紹介するアンソロジー



『はつなつみずうみ分光器 after 2000 現代短歌クロニクル』

著者／瀬戸夏子
発行／左右社
価格／2,200円(税込)

です。ここでいう「現代短歌」は、どのような定義でしょうか？

この本は、歌人の山田航^{わたな}さんの『桜前線開架宣言』(左右社)というアンソロジーの姉妹本なのですが、その本では「穂村弘以降」と区切りをつけています。穂村さんの本を読んだことはあるという人でも、他の歌人の歌を見てみたいと思った時に、歌集をそれぞれ買うのはハードルが高いだろうから、穂村さん以降の歌人を集めた本を作ってみようという企画だったそうです。だから、「現代」って書いてありますけれども、穂村さんのブレイク以降をまとめた本の、次の本というイメージで作っています。

——やっぱり穂村さんの登場が大きな転換期なんですね。穂村さんのデビュー作『シンジケート』は1990年ですから、それぐらいの時期がひとつの目安でしょうか。

そうですね。その3年前、1987年に「サラダ記念日」がベストセラーになって大ブレイクしたのが俵万智さんです。穂村さんと俵さんを比較してみると、いまの短歌ブームの広がりがちょっとわかるような気がします。

す。瀬戸さんの実感はどうでしょうか。

ブームと言われて6、7年ほどでしょうか。私の学生時代から比べると、めちゃくちゃブームだと思います。聞いた話ですが、友達がシーシャ屋に行った時に、たまたま居合わせたちよつといかつめのお兄ちゃんと世間話をしていて、なにか興味あるものがある？って聞いたたら「ああ、短歌とか」って答えたそうです。街でぼろつとそういう言葉が出てくるぐらいだから、結構流行ってるのかもしれないですね。

あとSNSを見ると、短歌と全然関係ない文脈で「現代短歌みたいで嫌」とかって言われていて、それが私はうれしくて。この場合、「しゃらくさい」みたいな意味だと思うん

少し前までは、メディアで短歌についてとりあげる際は、穂村さんに取材が集中してたような気がするんです。なぜならば当時、シテイボーイのブーム的な短歌が注目されていて、それは言い換えれば文学青年のブームなので、書く短歌もちょっと尖った作風の人が多かった。

でも今、短歌はもっと広がってきていて、一般的な感性を持っている俵さんの方に注目が集まっているようです。俵さんのすごさは、歌はもちろんですが、感性がマスなんです。文学ファン寄りじゃなくて、非常に一般的な感性を持っている。なので今、俵さんが再注目されているというのは、短歌がより広がっているという証拠かなとも思うんです。

基点を穂村さんに置くか、俵さんに置くか。俵さんがものすごく売れた後、穂村さんというシテイボーイの先駆けみたいな人に憧れている人たちが短歌に興味を持ち、そして今もう一回、俵さんが注目されている。最初は穂村さんからのプチブーム、そこから大きくなって俵さんが再注目されて、今一般まで広く巻き込んだ大きなブームが起きていると私は

続きは本誌で



インタビュー

空想も「各駅停車」で切り拓け！

——三人称にも「私」は滲む

歌人 笹公人さんに聞く



短歌との遭遇

——寺山修司との出会いから短歌に魅入られたそうですね。

高校生の頃、寺山の没後10周年で書店がフェアをやっていて初めて歌集を手に入りました。それがかなり自分好みで、僕も頭のなかにある妄想を短歌にしようと思いました。

今思うと、僕は寺山から短歌に入ってよかったです。なぜかと言うと、寺山は結構、百人一首の影響を受けているんですよ。上の句(五・七・五)で風景を描いて、下の句(七・七)で思いを述べる歌が多い。僕の師匠の岡井隆先生を含め、現代の歌人はそんな型をぶち破るために色んな歌を作りましたが、実は寺山の文体は割と伝統に則しているんです。

初期の青春短歌は歌人からも高く評価されますが、僕が好きなのは後期の『田園に死す』などで、

こっちはつくりものの世界というか、物語性が強くて評価は低い。寺山に弟はいないのに弟が仏壇を買いにいつて行方不明になったとか、そんなおかしい話ばかりで、僕はむしろそういう虚構、フィクションの世界に惹かれました。それで、僕は寺山の後に「三人称の文芸」としての短歌の世界を切り拓いていった感じです。

短歌はやはり一人称の私性の文学で、何か言えば作者のことだろうなっていうのが割と前提としてありますが、僕の作品で出来事を見ているのは第三者で、三人称だったりします。寺山を読んで「それもアリ」と思ったんですけど、やはり寺山は異質ですね。でも、そこを広げたい。さらにすごい短歌の宇宙があると思うからです。

僕の師匠は「歌の背後に作者の顔が見えるのが短歌」というルールを規定しましたが、むしろ僕はそれを否定するところから入った気がします。「別に物語性が強い歌があってもいいんじゃないの」

一度は入ったほうがいい。おかげで僕は基礎ができたように思います。

お作法でも 大げさでもない革命

——明治20〜30年代に「和歌革新運動」があり、当時の「十四日、オ昼スギヨリ、歌ヲヨミニ、ワタクシ内へ、オイデクダサレ」(正岡子規)といった作品について「これくらい過激にやらないと革命は起こせないという強い覚悟」を感じるとご著書『シン・短歌入門』(NHK出版)に書かれています。

過激ですよ。『古今和歌集』などしか読まないお年寄りは「何じゃこれ」って大激怒ですよ。短歌に勝手なイメージがあって「なりけり」とか取って付けたような文語調の歌を書く人は今もいます。正岡子規や与謝野晶子、石川啄木がいなければ、いまだに「お作法」みたいなになっていったんじゃないですかね。

——ご著書では、短歌は詩、文学であって、説明したい余情、圧倒的な幻視、読者の風景を一変させるなどの「深い感動」がある、と。この「感動」とは？
「短歌に救われた」とか言う人はいますが、僕は「みんな大げさだな」と思っていました。それに「僕の歌で

と。確かにフィクションの歌だと私性は薄めですが、やはり自分の経験、人生の産物ですから。

異質な先人たちにふれて

——先達の歌人といえば、大本教の教祖、出口王仁三郎の歌集を編纂されています。

オカルト雑誌などで王仁三郎の名前は知っていましたが、浪人中、ある予備校に出口王という先生がいて。出口先生は王仁三郎の曾孫で色々質問したことがあり、僕を覚えていてくださったんですね。のちに歌人としてメディアに出るようになったとき、先生から「会おう」とお手紙が来て、王仁三郎に縁ある方々と交流が始まりました。

あるとき、王仁三郎の歌、約15万首が現存していると聞いて軽い気持ちで「まとめたほうがいいですよ」と言ったら編纂することになって。読む

みんなが感動してくれたらありがたい」みたいな、うめばれた文章には反発を感じますね。でも、父親の介護で死ぬほど大変だったとき、伊藤一彦先生の「ベッドの父の襦袢替ふるをよるこびとしたる二月いまはかなし」という歌を読み、その発想があったか、最初で最後の孝行なのか、と気持ちが切り替わって。30年以上作ってきたけど、初めて短歌の力を思い知りました。もちろん暇つぶしにいいということもあります。

——今回の特集に歌を寄せてくださいました。五・七・五・七・七と指を折るわれは各駅停車の吟遊詩人

この歌の自註を聞かせていただけますか？

吟遊詩人には遠くまで旅して歌を詠むイメージがありますが、各駅の車窓が気になってそのたび



『NHK短歌シン・短歌入門』
著者：笹公人 発行：NHK出版 定価：1,760円(税込)

続きは本誌で

歌はどこからやってくるのか。 歌人は何を詠うのか。

昨年上梓された歌集『くるぶし』が話題の町田康さんと、
同朋歌壇の選者であり、両親や妹も歌人である永田淳さんに語り合っていました。

—対談—



町田康 (作家)



永田淳 (歌人)

根底にある日本語のリズム



永田 町田さんには昨年、私が所属している塔短歌会70周年記念大会「現代短歌シンポジウム in 京都2024」にご登壇いただきました。とてもいい講演をありがとうございました。
町田 いえいえ、ありがとうございます。

永田 まず、あらためて町田さんの短歌との出会いについてお聞きしてもいいですか。

町田 普通、短歌に出合うというのは、歌集とかを見ていいなと思って、何か自分も作ってみようとか。集まりに参加してみても、先生に習うとか。そういう感じかと思いますが、僕の場合はそうではなくて。小説とか、落語にふれていると、どうしても日本の昔の短詩型がところどころ出てきますよね。そういうところで自然

に体に入っていたというのが実際だと思います。

短歌だと五七五七七の定型がありますが、こういったものを書く時でも、日本語を音に出した時のリズムというのは否が応でも結びついてくるものです。もともと書いている小説などの散文に型はありませんが、やっぱり根底には日本語のリズムが鳴っていて、それに対して意図的に裏拍でいったり、わざと崩れたりします。その意味で、短歌のリズムも自

然と体の中にあつたような感覚です。

90年代の初めごろ、現代詩の朗読が流行っていたのですが、それに対して荒川洋治さんが批判するなどして議論されていた時期がありました。そういう状況で、詩を含むさまざまな文芸の朗読会が武蔵大学で企画されまして、当時僕も詩集を出していたからか呼ばれていました。そこでたまたま聞いたのが岡井隆さんの短歌の朗読です。

永田 その頃の岡井さんは、定型に



町田 康 まちだ こう

1962年、大阪府生まれ。1981年、パンクバンド「INU」としてデビュー。1996年『くっすん大黒』(文藝春秋)で作家デビュー。2000年『きれぎれ』(文藝春秋)での芥川賞受賞をはじめ文学賞を多数受賞。2023年から武蔵野大学特任教授。2024年に初の歌集『くるぶし』(COTOGOTOBOOKS)を上梓。

はまらないような歌い方をされていた時期ですね。

町田 「大島には連絡すると言つてたろ(言つてた)裏庭で今朝冬百舌鳥が」「冬螢飼ふ沼までは(俺たちだ)ほそいあぶない橋をわたつて」とかを讀まれていたと思います。朗讀というよりは、舞台上でぼそぼそつぶやかれるような感じで、何かすごいいいなど。想像していた短歌的な情感や情趣というより、尖った言葉の感じや、研ぎ澄まされた感覚に惹かれて、記憶に残っています。

その後、『新潮』という雑誌の短歌特集に、その話をエッセイで書いてたんですね。それを見た編集者が、岡井さんについて何か書いてくれと言つてきて「いや僕は素人で分かりませんけど」と言いながら書いてみたりました。

短歌で下手するとどつき回される？

永田 町田さんは早くからSNSな

し、逆に大多数の人からみれば僕のもの作るのが歪に見えるのかなと思います。

定型があるからこそ自分の監獄を打ち破れる

永田 『くるぶし』を最初に読ましてもらった時は、かなりはちやめちゃですごい歌集だなと思ったんです。初めは気づけなかったのですが、あらためて読むとほとんどの作品が五

どで俳句や短歌の投稿をされていたと思いますが、作る方はいつごろから始められましたか。

町田 90年代後半に小説を書いて以降、時折「短歌を作ってみませんか」とお誘いがあったんですが、「いえいえ、とんでもない」とお断りしました。やっぱり短歌や俳句は、専門家のやるものだという印象がありました。でも今は、わりと誰でもカジュアルに短歌って作るじゃないですか。「僕、短歌やるんですよ」みたいな若い学生とか。

永田 そうですね。

町田 だけど僕個人の感覚かもしれませんが、どつき回されてまうような気がしていたのです。例えば依頼を受けて、雑誌に載せるだとかをやつてしまえば、専門の歌人みたいな人に寄つてたかつて袋だたきにされるような気がして、全部断つていました。それでもいま歌集を作ったきっかけは、やっぱり自然に浮かんでくるからです。ふと五七五まで浮かんでも、あかんあかんって、ずっと抑えて禁止していました。

そんな時に『人間小唄』という小

説を書きました。実はその小説に短歌が出てくるんです。もしその短歌がどんな下手でむちゃくちゃでも、それは小説のなかで登場人物がやっていることですから、僕に責任ないじゃないですか。なんか言われても「いや、わざと下手につくっているんやんか」と嘘つける。一回やってみたらもう気楽というか、別に文句も言われなかったので、まあええかとなつたんです。

困つたのはその後で、雑誌の人がその小説の書評を依頼してくれたんですが、依頼相手は岡井隆さんだというんです。「おまえなんちゅうことしてくれてんねん！」と(笑)。驚いてしまいました。そんなに怒られもしませんで、そんなこんなでいまに至ります。

永田 かつては特に、短歌は伝統的な文芸という印象が強かったかもしれないですね。一方で、町田さんが昨年出された歌集『くるぶし』は、ある意味、さきほどおっしゃつてたような「どつき回され」そんなことを大胆に実行されている歌集ですよ。

町田 流石にもう慣れてきたところもありますから、むしろ現状の歌の

のがある。詩の型に言葉を当てはめることで、できてくるものがあるのでしょうか。

町田 短歌の定型について考えるうえでもう一つ重要なのが、短歌を詠むとはなんなのかということだと思います。今回読ませていただいた、永田さんの歌集『竜骨もて』の一首で「萩の穂の枯れいる空き地のひとところ冬日のながく四角く射しぬ」という歌がありますね。読み手はぱっと見た時に、まずこの歌の指し示す意味の範囲を読み取ります。

説明してみると、空き地があつて、萩の穂が枯れて茶色くなっているようなところに、冬の日が四角く一本だけ光の道みたいになっている。でももし、ただ景色を説明するだけなら、ほかにいろいろな方法があります。

永田 その通りですね。

町田 では、これを何でわざわざ歌で書くんでしょうか。突き詰めて考えると、より情報が伝わるからとかではなくて、こう書いた方が気持ちがいいからでしょう。もしみんなが同じ景色を見ても、それぞれ違うことを思い浮かべるし、「今晚は何を

続きは本誌で



永田 淳 ながた じゅん

1973年、滋賀県生まれ。1988年、「塔」短歌会入会。2009年、第一歌集『1/125秒』(ふらんす堂)により第35回現代歌人集会賞受賞。2023年、歌集『光の鱗』で第10回佐藤佐太郎短歌賞受賞。現在、「塔」選者。青磁社代表。京都芸術大学客員教授。本誌「歌壇」選者。

世界に対して挑発してみようというものでもあります。短歌はこれまでいろんな形があつたし、今も新しいものができていつてるかと思うんですが、もっといろいろあつてもいいのかなと思つてます。

例えば、僕が小説を書き始めた時にあつた文壇的傾向みたいなものは、僕にはすごく偏つて見えた。それに對して、この方がおもしろいやつていうものを提示してきたつもりです。短歌においてもメジャーで王道な傾向が、僕にとっては歪に見える

手探りは続く ——短歌の本を作る仕事

編集者

藤枝大（書肆侃侃房）

ふじえ だい

1989年生まれ。2017年より書肆侃侃房で勤務。短歌ムック「ねむらない樹」編集長。「現代短歌パスポート」「新編集集シリーズ」「現代短歌クラシック」などを創刊。詩歌と海外文学の書店「本のあるところ ajiro」を2018年に立ち上げ、運営している。

『ねむらない樹』(2018)。特集に「ニューウェーブ30年」。第一回笹井宏之賞の案内がある。



新編集集シリーズ『塚本邦雄歌集』
尾崎まゆみ編(2024)



2017年に書肆侃侃房に営業職として入社して、最初にふってきた仕事は「今度短歌の新人賞と発表媒体の雑誌を作るからそれを任せたい」ということだった。「それは編集部の仕事ではないか」と口から出かったが、それを言わないことで何かがおもしろくなると信じ、ひとまず新雑誌の目次案を作ることにした。その時点で「穂村弘と俵万智」ぐらいしか自分にとって通ってきた短歌はなく、ひとまず集められる雑誌や歌集、歌書を手当たり次第読んで、後発のこの雑誌がやるべきことを探そうとした。のちに編集委員制が導入されることになり、そこでおおよその企画が決まっていくことになるのだが、素人頭で考えた叩き台の当初案から採用されたのが「ニューウェーブ30年」だった。創刊号には穂村弘さんになんとか参加してもらいたい。同時に、これまでにはなかった何かで出て欲しい。そうして、あれよあれよという間に名古屋でシンポジウムが開かれることになり、誌面に採録させてもらえる

ことに決まった。「ねむらない樹」と名付けられた短歌ムックに無事掲載された座談会は大きな反響を呼ぶことになった。それを受け、2号目に批判も含めた論考を掲載、ついには「現代短歌のニューウェーブ」を総括する書籍も出版した。結果として大事になった。さまざまな議論が展開された。そうか、これが雑誌か、と思った。

短歌の新人賞は、早逝した歌人、笹井宏之さんの没後10年に合わせて2019年に創設した。いまは状況も違うが、その頃は年長世代が選考する新人賞が多く、2、30代の、どちらかといえば応募者と近い世代（この世代からの作品応募が笹井賞では最も多い）の選考委員による賞としてスタートすることとなった。副賞が歌集出版であることと、毎回ゲスト選考委員にも参加していただくのが特徴で、初回の文月悠光さん（詩人）を筆頭に、千葉雅也さん（哲学者）、小山田浩子さん（小説家）、森田真生さん（数学を中心とする独立研究者）、

濱田美枝子『『女人短歌』小さなものの芽生えを、女性から奪うことなかれ』(2023)



Moment Joanやん（ラッパー）などに選考に加わっていただいた。毎回選考の場合は真剣勝負で、そこでかわされる言葉のひとつひとつはどれも忘れられない。大賞の受賞者のみならず、個人賞を授与された方々も各所で活躍されている。この間、笹井宏之さんの出身地である佐賀県有田町のご実家に伺い、ご両親から生前のお話を聞かせていただいた。その一部は笹井さんの第一歌集『ひとさらい』出版から15年目となる2023年に作った笹井宏之特集号の誌面として記録することができた。

入社時に任された二つの「最初の仕事」がひとまずかたちになり、次はこれまで書肆侃侃房でやられていない領域を自分のテーマとすることにした。2013年の『つむじ風、ここにあります』（木下龍也）を皮切りにスタートした「新鋭短歌シリーズ」など、主に若手の第一歌集を軸に進められてきた会社の短歌出版。それなら、古典を新たなかたちで出すのはどうか。これが「新編集集シリーズ」立ち上げのきっかけだった。

2021年の葛原妙子からはじまり、山中智恵子、前川佐美雄、塚本邦雄の四人の歌集を年に一冊ずつ出版していった。かつてあった国文社の「現代歌人文庫」の現代版と言ってもいいかもしれない。ただ刊行していくだけではつまらないので、「ねむらない樹」で関連の特集や座談会を組んでいった。葛原妙子については、評伝『幻想の重量 葛原妙子の戦後短歌』（川野里子）

の新装版や、葛原が関わった歌誌「女人短歌」の歴史をまとめた『『女人短歌』小さなものの芽生えを、女性から奪うことなかれ』（濱田美枝子）につながった。「新編集集シリーズ」は2024年秋に完結したが、その後も『石川信雄全歌集』（鈴木ひとみ編）を出版するなど、引き続き過去の遺産に向き合い、その成果を現在のパッケージで世に問うていきたいと考えている。

アンソロジー『はじめまして現代川柳』を含めた現代川柳の句集出版（今年ようやく石田柊馬さんの作品＆批評集も出版できた）、『左川ちか全集』や『大江満雄セレクション』などモダンリズム／プロレタリア詩のリバイバル、『赤の自伝』（アン・カーソン／小磯洋光訳）や『埃だらけのすももを売ればよい ロシア銀の時代の女性詩人たち』（高柳聡子）など海外詩の現代的な紹介など、詩歌出版に関していろいろ試みてきた。シリーズ「現代短歌クラシックス」（現在全12冊）と「現代短歌パスポート」（現在全5冊）も続けている。営業職の時代に「短歌の本はとにかく売れません」と書店で置いてもえなかったことを一つのきっかけに立ち上げた書店「本のあるところ ajiro」も7年になる。

「短歌ブーム」という言葉が聞こえ始めてからも数年が過ぎ、いま短歌はどんな位置にあるのだろう。浮ついた初心からはずいぶん遠くまできたが、いまだやるべきことがあると信じて、これからも誠実に仕事に取り組んでいきたい。



詩歌と海外文学の書店「本のあるところ ajiro」。書籍の販売のほか、トークイベントや読書会、歌会も開催